

平成5年度和敬塾塾祭記念講演 平成5年5月16日
「世界は江戸化する」 明治大学教授 入江 隆則氏

カンボジアでボランティアの中田厚仁さんという方が亡くなりました。新聞でその記事を読みました。それから中田さんの父親の手記が載っている「文藝春秋」をここにくるまで読んでいました。素晴らしい文章だと思いました。「息子は、ある一つの目的を持って行動して、そして死んだ、本当に素晴らしい人生だったと思う。」と父親が言っています。そのところがすごいと思いました。

「信じるもののためには命を捧げて行動する、息子はそういう崇高さを持った人間のあり方をしめしてくれた。」とも書かれていました。中田さんがなぜ殺されたかの原因はまだわかっておりませんが、日本ではこの半世紀ぐらいは、一つの目的のために死ぬことが立派だとは思われていなかったのではないのでしょうか。生きてることだけが、一番大切だというようなことばかりが、この40年間言われてきたと思います。

しかし、中田さんのお父さんの言われたのはその反対のことです。たいへんすがすがしい気持ちになりました。私の少年時代の戦争中には、良きにつけ、悪しきにつけ中田さんのお父さんのようなことが言われていました。時代が変わると価値観が変わります。一つの使命があって、それに向かって生きるということは素晴らしいことだということを、戦争に敗れた以後なぜか言われなくなってしまった。ところが、日本の外では依然としてそれは立派なことである、美しいことであると言われていました。なぜ日本はそうなったのか、理由の一つはアメリカが日本を占領した7年間の間に、それまでに日本が行ったことを全部悪いことだと宣伝したことです。今になってみると、あのような言論統制をしなくても良かったと思いますが、当時のアメリカはそうは考えなかった。あれだけ死力をつくして双方が戦って勝った国と負けた国とができた直後だったのですから。

これはあまり知られておりませんが、アメリカの検閲は厳しいものでした。戦前に日本の当局者がやったような幼稚なものではない。日本の検閲は検閲したことがわかるような検閲でして、例えば新聞も不適當なところは黒く塗ったり伏字にしたりしていた。アメリカはそんな幼稚なことはしませんでした。7年間の占領中にやったのは、具合が悪い部分を黒い字を残さないで組み替えさせた。これが実は大変な心理的効果をもたらした。組み替えるには費用がかかります。そうすると予めこう書いておけば大丈夫だろうと言うことだけを書くようになってしまった。大変巧妙な作戦だったと思います。日本が過去に行ったことが少しでも美化されていたり、或いはアメリカの政策に反するようなことが書いてあると書き直させられるからです。昭和21年9月に共同通信社と朝日新聞社が、それにひっかかって大変な騒ぎになったことがありました。

戦争に負けた時の日本人は非常に静かでした。アメリカの占領軍が来た時も

静謐そのもので、これから何が始まるかと息を殺していたのです。しかし、その反面言いたいことは言っていた。戦争に負けたのは、これは軍事力の差で仕方がない、しかし日本は悪いことばかりしてきたのではないというようなことを最初は言っていた。ところが検閲が始まりましてからは、検閲にひっかかりますと組み替えに手間と費用がかかって大変なことになる。新聞はまだ費用が少なくてすむが雑誌とか本は大変です。出来上がってからこれは駄目だと言われると大変なのでひっかからないようなことだけ書くようになってしまい、それを7年間やっていたのです。それが戦後日本の言論の風土となったのです。

ここで中田さんの話を持ち出すことがよいのかどうかわかりませんが、ああいう人間の生き方というのは、戦後の日本では立派だと言わなくなりました。私は敗戦の時10歳の子供でした。子供で純真ですからそう感じたのですが、昨日まで別のことを言っていた人が突然がらっと変わって反対の事を言い出した。戦争に負けても世の中別に変わらないことは沢山あります。良いことは良い、美しいものは美しいものですが、それがそうでなくなってしまった。10歳の子供でしたから特にそう感じたのかもしれませんが。

それから漢字を変えました。仮名使いを変えるということも致しました。それも日本人の気持ちを変な形に曲げてしまったような気がします。

戦後半世紀日本の一部の人々が美化していたソ連・東欧の体制が崩壊しました。現在ではあの体制が良かったと言う人はあまりいませんが、ソ連・東欧が崩壊するまではそうではなく、日本に革命を起して、ああいう体制にしたいと思っている人は沢山いました。戦後の日本では占領初期のアメリカの日本弱体化政策と、マルキシズムが結びついたものが一つの勢力になっていました。これは大変なものでした。私の勤務先の大学のキャンパスのひとつが京王線の沿線にあって神田の駿河台には別のキャンパスがありますが、その間をスクールバスが運行していました。スクールバスを降りて、まず考えることは今日は機動隊が来ているかなということでした。それは催涙ガスの臭いで判るのです。10年前ぐらいまで何年間も催涙ガスのにおいがしていて、やっているなと思うと機動隊と全共闘が衝突している。バリケードがあって研究室には入れない。研究室には大したもの置いていませんでしたが、それでも本とかテープレコーダーのテープとかが滅茶苦茶にされた。そういう時代がありました。

その頃ソ連に行ったことがありました。経済はうまくいってない。品物も少なく品質も悪い。赤の広場の前に Gum という百貨店がありそこへ行くと品物の程度がわかります。映りのよくないテレビが堂々と売られている。命令経済で品質がよくなったり、人々の労働意欲が高くなったりするはずがない。にもかかわらず革命をやってソ連のようになるのがいいということを言っていた人が沢山いました。

それがソ連・東欧が崩壊してから黙ってしまった。日本人は寛大ですから過去のことはあまり追及しないで共存しようとする。ソ連・東欧の体制が良いと言っていた経済学者がいましたが、今になって職を失ったという報告はどこにもない、これは恐らく日本の良いところなのかも知れませんね。日本人は争って勝

負の結果が出るとあまり負けた敵を追いつめない。

私は、常磐線を使っていて上野駅で降ります。上野公園に西郷隆盛の銅像があります。彼は西南戦争の賊軍の大將です。明治政府に反抗した人の銅像を首都の大公園に飾っておく、外国人はその寛大さにびっくりします。日本にはそのようなところがあります。

やっと最近日本の空気が少し変わってきました。青年の生き方にも目的があるような無いような、目的という金儲けしかないような感じでしたが、これからは少し変わるかもしれない。小学校に入る頃から将来の金儲けコースに組み込まれているようなことがあって、それに疑問を持って自分の生き方を模索するような人は取りこぼされてしまう。しかしこれからは、だんだんそういうことも変わらないといけないでしょう。

日本には良いところも沢山あります。これは外国に出て行ってみればわかります。反面まだ悪いところも残っていて、集団のいじめに現れているような変な集団主義がある。皆さんの中には小学校や中学校でいやな思いをした人が多分何人かはいると思いますが、最近のことではなくて昔からありました。集団の中の間人間関係の現われがいじめの形で出てくる。

私は、昭和10年に横浜で生まれて、戦争が始まって翌々年昭和18年に中国地方の山奥の村に疎開しましたが、大変ないじめにあいました。あの頃の日本は今のよう標準語が全国的でなく言葉に差がありました。横浜で普通話をして言葉は山奥の村では通じないし、向こうの言っていることが分らない、外国へ来たようなものです。田舎の子は女の子でも炭一俵かつげますが、私だけが体力がなくてかつげなかった。異質だったのです。着ているものにも差がありました。向うはお米があるのに、こちらは食べるものがなかった。私は一人で孤立無援でした。いじめは凄まじいものでした。山を越えて小学校まで歩いて4キロありました。峠を越えていきますがその間人家がありません。途中で相手が10人、20人と待ち伏せして、殴る、崖から突き落とすなどされる、誰も見ている人がいない。崖からはい上がっていくと上にいる人間が全員並んで小便をかける、汚いという意識はなくただ苦痛でした。なぜいじめられたかということ、私が都会から来て変わっているということだけのことでした。向こうから見れば非常に異質であった。そういうことは日本の社会にずいぶんあります。

戦後の日本では経済成長などの素晴らしい面もあったが、社会心理的というか人間の精神の面では悪いいやな面がかなりあったと思います。それをどう表現したらいいか分かりませんが、たぶん日本人の悪い部分が現れたのではないかと思います。マスコミが特にそうだったと思います。最近は少しは良くなってきたかもしれない。もちろんこれは比較の問題でいろいろな人がいろいろな時期にいるわけですが日本人の心に鬱屈したものがずっとあった。

しかし、世界は大きく変わっています。この間10日ばかりカンボジアに行ってきましたが、アジアの人が沢山旅行をしていました。これにはびっくりしました。シンガポールから新婚旅行で来た人とか、香港から来た技術者とか、ア

ジアの人がアジアの中を旅行して、各地のことをよく見聞している。カンボジアそのものはまだ生活水準は低いが、アジアの経済は今一番伸びています。日本を追って香港、台湾、韓国、シンガポールが伸びて、タイ、マレーシア、インドネシアがそれに続いている。日本が経済成長に成功してその後をNIESが追いかけてその後をASEANが追っている。このようにアジアが伸びているということは世界的に、大きな意味を持っていると思います。20世紀の初期の戦前のアジアはほとんどが西欧諸国の植民地でした。カンボジアはオランダ領、マレーシアはイギリス領、ベトナムはフランス領、それからフィリピンはアメリカがおさえていました。19世紀の末頃には中国も分割されてアフリカ分割と同じようになるだろうと言われていました。ヘーゲルのような哲学者でさえそう予言していました。

それを食い止めたのは実は日本なのです。1904年の日露戦争にもし日本が負けていたらえらいことになっていたでしょう。ロシアは北の方から中国を分割しようとしていましたし、フランスはカンボジア、ベトナムの方から中国に入っていくとしていた。イギリスは揚子江の領域を自分のものにしようとしていました。ドイツは青島から、アメリカも遅れてはならじという状態でした。日本が負けていたら中国分割は現実化していたと思います。日本は勝てると思って戦ったわけではない、良くいって五分五分で、国力を考えたら負けて当たり前と思っていたのです。人間というものはそういうものかもしれませんが、大体勝った後というのは良くない。日露戦争のときも負けると思っていた初期には、朝鮮半島に行って人を雇っても給料を水準以上に払うし面倒もよくみた。現地の人には日本に協力しました。それが日本の勝利が確実になってくると、日本人は血を流しているのに、朝鮮人や中国人は血を流さずに傍観しているという意識が出てくる。湾岸戦争の時と同じで、あの時は韓国でさえPKOに協力しているのに日本はどうしたのだと言われていた。これと同じようなことを日露戦争の勝利の後の日本人はアジアの人に向かって感じていました。そのときに日本人が成すべきことは、そのような気持ちを押さえるようにすることだったのです。

日本とそれをとりまくアジアの未来は、長期的にみるとたぶん明るいものになると思います。18世紀から19世紀のヨーロッパは日の出の勢いでした。ヨーロッパ人にあらずんば人にあらずといった感じで、明治の人たちは大変な劣等感を持っていた。夏目漱石はロンドンに行って劣等感の固まりになって外にも出られなかった。明治4年には日本政府の多数の閣僚が世界を見てまわりますが、すっかり絶望して帰ってきた。とてもヨーロッパに追いつけないと思っていた。ところがその後120年の間に形勢が変わってきた。今のヨーロッパは逆に文明的に落ち目だという感じを持っています。私の友人がミュンヘンで開かれたユーゴスラビアの和平に関する会議に出席した話を聞きましたが、何の手も打てない無力感がただよっていたそうです。ヨーロッパの主要国が全部集まって協議しても内紛が治められないことに対する深い絶望感がある。和平どころかユーゴスラビアの内紛が未来のヨーロッパの縮図ではないかと言う人も

います。

本日の題は、「世界は江戸化する」という題ですが、実は世界が冷戦が終わって蜂の巣をつついたようになっていますが、私はこれからの世界は江戸時代の日本に学ぶべきことが多いと思っていますのです。

例えば環境問題ですが、江戸時代の人は大変環境に気を使いました。江戸時代の初期は大開発時代でやはり環境破壊が深刻だった。そこで徳川幕府は1666年に「山川掟（やまかわおきて）」というのを出して、山と川をもっと大切にしようとした。江戸だけでなく日本の各地でこの考えが広がって行きました。秋田県の能代海岸の防風林などはそのとき作られたのです。80万本の黒松を植えたといえます。

日本はその当時狭い一つの閉鎖形にして、各藩が力を持っていて武力紛争が起こってもおかしくなかったのですが、戦争しないようなシステムを作りました。そのシステムについても林業政策と同様に今世界から注目を集めています。

今世界は非常に狭くなりました。ニューヨークまで数時間で行けます。しかし当時は江戸から京都まで早馬を飛ばして70時間かかりました。ところが現代は株の情報は3秒で世界中をまわり、人間も1日で世界の果てまで行けるようになっていきます。そうすると今の世界のほうが狭いかもしれない。その狭いところに色々な宗教的心情を持った人々がいて、また武力を持った集団がいる。江戸時代の前の日本の戦国時代のようなのです。そうしますと、江戸幕府は財政が豊かではなかったにもかかわらずあれだけのことをなぜできたのか、これはシステムの問題として研究する価値があるのではないのでしょうか。

日本全国の大名の配置が巧妙でした。徳川家に対して危険な外様大名の回りを囲むようにして対立的な大名を配置した。また情報を非常に大事にしました。どこかの藩が城を作る動きがあるというような情報を常に集めていました。

もう一つは、消費経済の発展です。参勤交代というのははじめは幕府が命令したことでなくて自然発生的にできたものなのですが、1年ごとに江戸で暮らして情報交換をしますから自然に日本全体のことがわかってくる。江戸が繁栄しているのを見れば自分の国も繁栄させる努力をする。そこでバランスのとれた経済の発展につながってきました。江戸時代の安全保障をそのまま現代の世界にあてはめることは出来ませんが、読みかえることはできると思います。宇宙時代になり衛星で情報が緻密に集めることができます。お国替えはできませんが三次元空間を使ってそれと似たような相互の抑制体制が可能かもしれません。そのようなことを考えている人がアメリカにもヨーロッパにもいます。もう一つの、世界の経済の均衡をどうやって保つかという難しい問題もありますけれど、これも江戸の経験に学べる部分があるかもしれません。

日本人は一般に自己主張が少ないと言われますが、自己主張しなければ大義名分が立たない国家もあります。実は日本もそれをやった時代があります。古代の律令国家です。律令国家というのは理念国家で、日本にも中国に匹敵する

律令があるのだと見せることが必要だった。ところがその後鎌倉幕府は面白いことをやりました。律令は律令でよいけれど、少々不便なところがあるから修正したいと考えて「貞永式目」というのを作った。律令は大事にしますと言っていましたでしたが気がついてみたら武士の社会になって「式目」の方が重視されていました。日本は理念を出さなければいけないという人がおりますが、一つの理念に凝り固まると失敗の始まりになりかねないので、「式目」で修正するだけにしたのです。構えあって構えなしといったところですよ。

共産主義は一つの構えです。これで全部やろうとすると必ず綻びるというようなことを当時の人は常識として持っていたのです。私は今の日本は近代西洋を仮りに「律令」だとして、鎌倉幕府がやったような「式目」を作る行き方がよいのではないかと思っています。つまり「律令」に対抗理念を出して張り合うのでなくて、近代西洋という「律令」を重視しながら、それを「式目」で日本風に修正するという態度です。

今私は江戸時代の特徴を四つあげました。環境を大事にして人間との共存をはかったこと。安全保障を大変うまくやったこと。バランスのとれた経済繁栄に知恵を出したこと。あまり理念・理念とって角を突き合わせなかったことです。ヨーロッパの人は「神の前の人間の平等」とよく言いますが、「人間の前の神の平等」という日本人がいます。人間の前では、イスラム教の神もキリスト教の神もユダヤ教の神も仏教の仏も平等であると考えれば宗教戦争は起こらない。これは日本的発想で面白い。

私は現代の日本の若い人々は、たいへん面白い生きがいのある時代に生きていると思います。私は40年ぐらい早く生まれすぎました。今10代から20代だとよかったです。20世紀末から21世紀にかけての日本に生きていることは、もしかするとルネサンスの花が咲こうとしているイタリアに生きているようなものかもしれません。或いは産業革命が始まって世界のトップを切ってイギリスが近代化に進み始めたときに生きているようなものかもしれません。日本にはいろいろな可能性があり、皆さんにはやりがいのある仕事が沢山待っています。

この間ミッキー安川というタレントの方が、フォーシーズンズホテルにクリントンの友人だというアメリカ人を3人つれてきました。クリントン政権の中にはほとんど日本のことを知っている人がいない、日本の場合は政権が交代しても官庁がしっかりしているからそれほど影響はありませんが、アメリカの場合は政権が交代すると人が全部入れ替わります。その結果日本の専門家がいなくなってしまう、そこで少しでも日本の空気に触れてもらうために個人的に連れてきたというのです。そういうことを若い皆さんに、もっともっとやってもらわなければならない。

ロンドンに日本大使館がありますが、私がロンドンにいたときイギリスにある日本の企業の活動を調べたくて電話をしました。しかし大使館の持っている情報はわずかなものでした。その後アングロ・ジャパニーズ・エコノミック・インスティテュートという団体があるのを知り、そこに行ってみたら日本人がイギ

リスで何をやっているかとの活動状況がすべて調べられておりました。日本の医師会会長がいつ来てどこに行き何をやったかということまでわかるようになっていた。今の日本の国際化は、ものすごいようでも実情はその程度なのです。ですから若い皆さんにやらせてもらわなくてはならないことは、本当に沢山あると思います。アジアはこれから伸びて行くでしょうし、アメリカも東部から西部へ重心が移っています。ロシアもウラル山脈からこちらは日本と協力しなければならなくなるかもしれない。そういうことには、これから日本の若い人々が全部対応しなければならないのです。日本は明治維新からいろいろなことをやってきて、失敗も成功もしましたが、今や新たな出発点に立っていると思います。

ここでまた問われているのは、見識とか指導力であるとか、的確に判断する能力とか、時には命をかけてもやるべきことがあるとか。明治以後の試行錯誤を経て、20世紀末に再び出発点に立ったのです。歴史の見直しも行なわれるでしょう、そのような中で現在20歳の皆さんは生きているのです。素晴らしいことではありませんか。そう申し上げて和敬塾創立38周年のお祝いの言葉といたします。

御清聴ありがとうございました。